



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2016/01/12(火)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 176

オールジャパン道予選及びオールジャパン 2016 を振り返って

札幌大学男子バスケットボール部
ヘッドコーチ 町田 洋介

【オールジャパン道予選 決勝 vs 宮田自動車】

道内最後の大会である道予選を迎えるにあたり、宮田自動車には春の会長杯での敗戦の借りを返すという意気込みで、優勝を目指して臨んだ。

決勝での対戦相手として予想していた宮田自動車は、経験豊富なペリメターの選手は勿論のこと、インサイドに高さを擁するチームであるため、2-2-1ゾーンプレスによって前からプレッシャーをかけることでハーフコートでの時間を短くさせ、2-3ゾーンとポストトラップにてインサイドを機能させないようにすることで、主導権を得ることを試みた。

決勝では、前半はマンツーマンによるポストトラップを主軸として臨んだものの、ガードからのトラップを上手く機能させることができず、相手オフェンスの起点を潰し切れずに、60%を超える高確率でシュートを沈められた。また、オフェンスではペイントエリア内でのシュートが少なく、アウトサイドシュートに偏った結果、シュート成功率は30%台に留まり、終始宮田自動車にリードを奪われる結果となった。

前半の結果を踏まえ、第3ピリオドでは、開始から2-3ゾーンを仕掛けることで局面の打開を試みた。しかし、ゾーンの収縮や各ポジションの連携・連動の不十分さが露呈し、宮田自動車に対し、良い形でシュートチャンスを創出させてしまうことに繋がった。

結果、宮田自動車のガード陣にアウトサイドシュートを高確率で沈められ、一時は15点差まで引き離されることとなった。

これを機に、ディフェンスを春から時間をかけて築き上げてきたオーソドックスなマンツーマンに切り替え、一対一でのディフェンスを強調したところ、ディフェンスの強度と連携が高まったことによって流れが変わり、後半の宮田自動車のシュート成功率を45%以下にまで下げることに成功した。また、激しいディフェンスを起点にスティールや速攻が増えたことにより、前半は30%台だった我々のシュート成功率は、後半では約68%にまで向上した。

最終的には土壇場での逆転により1点差で勝ちきることができたものの、前述の通り、ゾーンとポストトラップの精度に課題を残す内容となった。しかしながら、ゲームを通してハードなディフェンスを継続できたこと、ゲームの最終盤にトランジションを上げられたこと、フリースローを確実に決めることができたことは大きな収穫であった。

【オールジャパン 2016 一回戦 vs 東京エクセレンス】

対戦相手となった東京エクセレンスはNBDLで4位、インサイドには204cm、215cmのインド代表選手を擁し、4番ポジションには190cmを超えるプレイヤー、2番・3番にはシューター、1番には経験豊富な若手とベテランを揃える好チームである。

そのような相手に対し、ディフェンスでは道予選同様、2-2-1ゾーンプレス、2-3ゾーン、ポストトラップを準備した。また、オフェンスでは春から取り組んできたオンボールスクリーンに磨きをかけ、アウトサイドを起点にギャップを創出してインサイドに攻め込むことを中心に準備をした。オフェンスについてもディフェンスについても、新しい戦術を加えることはせず、それぞれの精度を上げることを念頭に置き、最高の相手に対し、今シーズンの集大成をぶつけることを目的として位置づけた。

特にディフェンスにおいては、道予選時の反省も踏まえ、ゾーン時のトラップの仕掛け方、ポストトラップの仕掛け方の種類、コミュニケーション、連動といった部分を突き詰めることに多くの時間を費やした。その結果、本番のゲームにおけるプレスやゾーン及びポストトラップ時にも、より攻撃的なディフェンスを仕掛けることができるようになり、東京エクセレンスから幾つかのミスを誘発させることに成功した。

また、例年の課題であったフリースローの確率の低さは、このゲームでは85%を記録し、今シーズンを通しての大きな成長点であった。加えて、オンボールスクリーンを起点にしてのペイントエリアへのアタックやノーマークでのアウトサイドシュートも数多く試みることができた。しかしながら、このゲームの2Pシュートの成功率は41.2%、3Pシュートの成功率は28%に留まり、点差を広げられる要因となってしまったことは明らかである。特にミドルからロングレンジのシュート成功率の向上に関しては、引き続き、より一層努めていく必要があるということを確認することができた。

以上のように、より強力な相手と対戦するにあたり、準備期間と実際のゲームを通し、ディフェンス面ではチームディフェンスのバリエーションを増やすことができ、その精度を向上させることができた。また、オフェンス面ではオンボールスクリーンの精度向上が感じられたとともに、更なる課題も得ることができた。

これらのことは、12年ぶりという出場機会を掴み取ったことによって得られた貴重な財産である。そして、道協会、北海道学連、OB・OG、保護者の方々といった、我々をバックアップして頂いた多くの方々のお力添えがあったからこそ得られた経験に他ならない。

そうした方々への感謝の気持ちを忘れず、新しいシーズンも更なる情熱と努力によって、北海道のバスケットボールの発展に貢献できるよう全力を尽くしていく次第である。